新聞@スクール

発達障害の子らに配慮

ノートの色やデザインを工夫

読み書きに困難があるなど、発達障害の可能性がある小中学生が増えています。そんな子どもたちも含め、誰でも使いやすいユニバーサルデザイン（UD）の文房具が作られるようになってきました。どんな工夫がされているのか、成美（なるみ）さん、成彦（なるひこ）さんと学びましょう。

成美　文房具を買いに行ったら、珍しいノートを見つけたよ。小学生用の学習帳なんだけど、四角いマスの中心に点があったの。私が使っていた学習帳は、マスに十字の点線が印刷されていたんだけど、それより使いやすそうだったよ。

記者　それはUDの文房具ですね。ふつうの学習帳にある十字の点線は、マスの中心を示すことで、バランスよく字を書けるようになっています。しかし、発達障害などで視覚情報に過敏な子は、十字の点線が気になって字が書けないことがあります。でも、中心を点で示せば、そうしたハンデがあってもスムーズに字を書くことができます。

成彦　そもそも、UDって何だろう？

記者　障害の有無や年齢、性別などにかかわらず、誰もが使いやすいように配慮されたデザインのことです。

成美　だから私もUDの学習帳を使いやすそうだと感じたのね。

記者　そうですね。その学習帳は、ノートメーカーの大栗紙工（大阪）が2年前に発売したものです。発達障害の人たちから、市販のノートの使いにくいところを聞き取って開発したそうです。

成彦　マスのほかにどんな工夫がされているの？

記者　ふつうのノートは白い紙でできていますが、この学習帳は、薄い紫色、薄い黄色、淡い緑色の3種類から選べるようになっています。視覚が過敏な人は、白い紙をまぶしく感じることがあるためです。

このほかにも、1列おきに薄い網掛けが印刷されています。自分が書いている行が一目で分かるので、書いているうちに行が乱れるのを防ぐことができます。この学習帳は、累計1万2000冊が売れているそうです。

成美　それだけ多くの需要があるということね。

記者　「ディスレクシア」といって、知的に遅れはなくても、読み書きに困難がある学習障害の一種を抱える子もいます。こうした症例への理解が進むにつれて、誰でも使いやすいノートが開発されるようになってきました。

例えば、一般社団法人「日本医療福祉教育コミュニケーション協会」（広島）が手掛ける「カラーマスノート」は、平仮名やカタカナ、漢字の書き写しが苦手な子に配慮したノートです。1マスが4分割され、空色、黄、ピンク、緑の4色に印刷されています。字の配置を意識しながら、手本と同じように、バランスよく、正確に書き写しやすくするための工夫です。

成彦　ノートに苦しんでいる子がいるなんて考えもしなかったよ。身近に結構いるのかな？

記者　文部科学省の2022年調査では、通常学級に在籍する公立小中学生の8・8％に、発達障害の可能性があるとみられます。12年の前回調査から2・3ポイント増えていて、35人学級なら3人いる計算です。

成美　きっと、ノート以外にも文房具で困っていることがあるんじゃない？

記者　その通りです。中には、ハサミの先端に恐怖を感じる子もいます。そこで、長谷川刃物（岐阜）は、刃に安全カバーを付けたまま切ることができるハサミを開発しました。ふつうのハサミのように手で持って使えるほか、握力が弱い子は机の上に置いた状態で切ることもできるデザインになっています。

大手文具メーカーのトンボ鉛筆（東京）は、聴覚過敏の子などに配慮し、ノック音を低減させたボールペンなどを出しています。

成彦　色々なUD文房具が出てきているんだね。

記者　発達障害といっても、一人ひとりが抱える困難には個人差があります。より様々なUD文房具が開発され、勉強につまずいたり、学校が嫌になったりする子が減っていけばよいですね。

誰でも使いやすいよう、工夫されたデザインのノートとハサミ（手前中央）＝沼田光太郎撮影

＊今月から「成美、成彦のなるほど！」を刷新し、原則月1回の掲載となります。成美と成彦に学んでほしいテーマを募集しています。

＊ご意見は〒100・8055読売新聞東京本社教育部（ファクス03・3217・9908、メールkyouiku@yomiuri.com）へ。

教科書の文字も鮮明な書体に

夢運ぶ鈴の音
夢運ぶ鈴の音
夢運ぶ鈴の音

（上から）ユニバーサルデザインの教科書体、一般的な教科書体、一般的なゴシック体

学校現場では、教材などのユニバーサルデザイン（UD）化が進んでいる。

2020年度から教科書に使われ始めた文字は、UDの「教科書体」だ。

開発したフォント作成大手のモリサワ（大阪）によると、従来の教科書体は、毛筆による楷書体を基本にしており、「はらい」や「はね」など、文字の先端にかけて細くなる特徴があった。しかし、学習障害の子の中には、文字のとがった先端部が気になり、文章を読み進めることが難しい例もあった。

そこで、UDの「教科書体」は、文字の先端も含め、太さをほぼ均一に整えた。同社によると、教科書だけでなく、一般社会で広く使われているという。

一般的なチョークで黒板に書かれた文字を識別しにくい子でも、文字が鮮明に見えるよう改良された「色覚チョーク」の導入も進んでいる。18年度から市内の全小中学校で色覚チョークに切り替えた千葉県松戸市では、「色がクリアに見える」「字の輪郭がはっきりした」と好評だという。

同じく18年度から市内の全小中学校で順次導入した兵庫県尼崎市教育委員会の担当者は、「全ての子が黒板の文字を読みやすくなった。子どもの色覚に対する教員の意識も高まった」と話す。

教員の意識改革も必要

中野泰志さん
慶応大教授

ユニバーサルデザイン（UD）に詳しい慶応義塾大の中野泰志教授（特別支援教育）に、教育現場で求められる配慮について聞いた。

◇

様々なUDの文房具が開発されている背景には、昨年4月の障害者差別解消法の改正によって、障壁を取り除くための「合理的配慮」が、民間企業や私立学校の義務となったことに加え、ダイバーシティー（多様性）に対する社会的な関心の高まりもあるとされます。

発達障害には、▽興味やこだわりが強い「自閉スペクトラム症（ASD）」▽注意が移りやすい「注意欠如・多動症（ADHD）」▽読み書きや計算に困難さがある「学習障害（LD）」――などがあります。UDの文房具は、これらの子どもたちの困難さを解決する選択肢として注目されています。

ただ、教育現場には、みんなで同じノートや筆記用具を使うことが「平等」だと考える教員がいることも事実です。発達障害などがある子どもの学習意欲や自己肯定感を低下させないためにも、教員の意識を改める必要があります。形式的な平等ではなく、その子の特性に合った文具を選べるようにすることが重要です。

現在、市販されているUDの文房具だけで、全ての子どもの困りごとを解消できるとは限りません。今後も様々なUDの製品開発が活発に行われ、選択肢が増えてほしいと思います。

（今月は松本将統が担当しました）